

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

佐高 信 著

『新 師弟物語』

(2012年 岩波現代文庫)

「師弟」は生き延びているのか

「師弟」というコトバが死語となってから久しい。「弟」は数こそ減ったが、まだ生き延びている。しかし「師」はすでに絶滅した。こうした時代の中で「師弟」がいかに生き延びているのかを、学界、政界、財界、芸能界、落語界、映画界、俳句界、さまざまな世界で探し出すのが本書の狙いである。「求める者の前にこそ、はじめて師はその姿を現す」。これが10編ほどの話を通じて著者が訴えようとしているメッセージである。

「師弟」を結び付ける絆

落語の師匠は弟子を前に据えて、一対一で教えるしかない。同じことを何回も繰り返させ、癖を直し、口伝で教える。桂枝雀は桂米朝の最初の内弟子だった。その枝雀が心の病にかかったことがある。30歳を過ぎ、妻子ある身で「高座が怖い病」にかかった。ところが師匠の米朝は「残念ながら、自分はそういう病気にかかった経験がないので、何のアドバイスもできない」というだけ。彼は「無言のメッセージ」をもって伝えようとしたのだろう。

枝雀は一人でもがきながら、何かのきっかけで狐ツキが落ちたように「心の病」から抜け出した。そして「長らく旅に出ておりましたが、戻ってきましたので、ふたたび高座に立ちます」といって、復帰を果たした。もともと枝雀の母親は枝雀に英語の先生になってもらいたかった。それを振り切って枝雀は芸人となった。心の病を癒した後の枝雀は、新作落語、英語落語に意欲を燃やし、関西落語界の第一人者となった。ところが、60歳で自殺してしまう。その時、師匠の米朝は何のコメントも出さなかった。亡くなる15年前、米朝・枝雀親子会が開催されたが、控えの部屋で涙ぐんでいる枝雀の姿が目撃されている。二人を結びつけていたのは、言葉にならない絆だったのだろう。

城山三郎は学生時代、経済学者山田雄三のゼミに顔を



出した。ところが山田教授の授業は、数学で始まり数学で終わるものだった。熱い話を期待していた城山は、それに満足せず、ゼミを辞めたいという短い手紙を送った。それに対して山田教授は便箋数枚に及ぶ分厚い返事をくれた。その返事は今では城山の書いた『花失せては面白からず』(1996年刊)に採録されている

ので誰でも読める。

この長文の返事の中で、当時47歳だった山田教授は「大きな思想」に憧れる青年の気持ちを理解する反面、自分は自分で数学だけの実証的な研究を通じて、人と人との関係を探ろうとしているのだと、自分の学問的な立場を説いた。この分厚い返書を受け取った城山は、まだろくすっぽ面識もない新生に、これほど親切な返事をくれる山田教授に仰天する。それ以来山田教授からの電話となると、城山は自然と直立不動の姿勢をとるようになった。

「志」なくして「師」は現れず

宮嶋清次郎の名を知る人は今では少ない。日本工業倶楽部の会長を16年間務めた財界の重鎮である。この倶楽部には冷房はもとより、洗面所はお湯も出なかった。メンバーから苦情が寄せられると、「冷房がないと会議ができないような経営者、お湯が出ないと手を洗えないような老人は、とうてい企業の厳しさに耐えられないからやめてもらえ」といった。女工哀史で有名な紡績企業に入社した桜田武は、この宮嶋のもとで鍛えられた。若い時の宮嶋は女工を守る側ではなく、圧迫する側に立った。その代わり自分が経営陣に加わると、紡績業界のトップを切って、深夜労働を廃止した。昭和4年のことである。勲章をもらって当然と見られていた宮嶋はそれを固辞した。そして日経連代表理事桜田もまたそれを固辞した。「師」が姿を消した理由は簡単である。人々の心から「志」が消えたからである。